

【参考】視察事業評価シート一覧

視察事業	「視察事業に対する評価」に関する意見		
	1 事業の評価に値する事項について	2 事業の改善すべき事項について	3 その他
◇第2回 地域でのアート活動を学ぶ勉強会 日程: 令和5年8月24日(木) 場所: 堺市役所	●川那辺POご自身のアート活動の事例に基づいて、本番までの経過や試行錯誤された過程、広報の実際、そして本番を経験して分かったこと(「これを用意すればよかった」等準備に関すること、イベントに参加した人たちの様子など)が具体的に紹介された。それにより、アート活動に従事している参加者や、これから始めたいと考えている参加者は、実際のな情報を得たり、活動を進めていくことに対する具体的なイメージを持てたりしたのではないかと考える。 進行役の中脇POが、川那辺POの話と参加者の関心をうまくつなげる働きかけをされたことで、参加者もより積極的な姿勢で話を聞き、質問等もしやすかったと思われる。 上田PDもご自身の活動における具体的な例を話されたことにより、参加者が共感したり、アート活動の実際をより具体的にイメージしたりできたのではないか。 ●参加者層は、既にワークショップ開催責任者として経験豊富な方から、学びの目的での参加という方まで経験値に差があったが、講座内容はどちらかに偏ることなく、双方のニーズを掘り上げる非常にライブ感のあるものであった。また勉強会が始まる直前まで、より良い勉強会にしようとアーツカウンシルのメンバーの方々が熱のこもった意見交換をされ、準備していたことをそのまま述べて終わりとはしない姿勢に本事業に対する熱量を感じた。	●参加者を増やす。より多くの、アート活動に従事している、あるいはこれから始めたいと思っている人に参加してもらうことで、参加者同士の事例も共有できれば、課題やその解決のための方策等もより具体的に話し合えるのではないかと考える。 ●広報で事前に周知する機会が今回は無かったとのことで、少人数での開催となった。それ故に参加者と講師とのディスカッションが豊かに展開され、ある意味とても贅沢な勉強会であったが、多忙な講師の方にお越しいただける機会なのだから、できる限りの事前周知と、参加希望者が集い易い時期や時刻を鑑みて開催されるのが望ましいと思われる。	●広報で事前に周知する機会が今回は無かったとのことで、少人数での開催となった。それ故に参加者と講師とのディスカッションが豊かに展開され、ある意味とても贅沢な勉強会であったが、多忙な講師の方にお越しいただける機会なのだから、できる限りの事前周知と、参加希望者が集い易い時期や時刻を鑑みて開催されるのが望ましいと思われる。
◇第3回 地域でのアート活動を学ぶ勉強会 日程: 令和5年10月4日(水) 場所: 堺市役所	●当日集まったグループの代表、あるいは一員が、自己紹介に始まり、直面している悩みを打ち明け、それを言語化していく。自身の悩みを言葉に出して話すという事は、問題点を明確にする。また、他者の懸念材料を聞くことで、共感を得たり、違った悩みを知ることができる。グループ活動において、継続年数が経てば経つほど、様々な問題点や、結束の難しさに直面する。そういった場合において、このような勉強会は非常に重要な役割を担う。また、これまでの中脇POご自身の活動の経験から、対処方法をレクチャーし、学びの場となった。その考え方は、それぞれの活動内容に置き換えて捉えることができ、今後の問題解決や活力に繋がるものと感じた。 また、当日集った違った分野の者同士が交流でき、新しい結びつきや、さらなる活動の発展に繋がっていく良い機会でもあった。 ●今回は、業務として企画運営や地域支援を担う人材の参加が複数あり、専門的且つ活発な議論が展開されていた。また、講師による豊富な実例は、課題解決に向け具体的な道筋を示していた。参加者の活動分野が多岐にわたっていたため、その分野ならではの課題と分野を横断する課題が明確となり、参加者が相互に有益な情報を得られたと考えられる。	●実施時間や、テーマにのせいかもしいないが、当日集まった人数が他県の方やプログラムオフィサー1人を含め、7人と少なく、身内感は否めない。人が集まらなければいくら内容がよくても意味がない。ターゲットを堺市民の全範囲とするよりも、分野などを設定するか、もう少し絞り込むべき。情報はこれまで同様大きく打ち出して、例えば、今回は、〇〇文化会館のグループに向けてなど絞り込み、会館の受付業務において、直接グループさんに案内を渡してもらう。実施場所もその会館で行う。そうすれば、公報もしやすくなるし、集まる方も行きやすい。時間設定もターゲットに合わせる。18時から20時というのは、会社帰りのサラリーマンなどの研修時間帯である。会館で実施する以前には、グループ数や種類の調査も必要となるので、そこでの活動状況の把握に繋がる。そして会館の職員も交え、勉強会を実施すれば、職員自身の学びの場となるし、グループの悩みも知ることができ、双方にとって実りある機会となる。 また、この勉強会を補助金につなげていきたいという考え方であれば、アート活動を学ぶ勉強会という文言がアートに限られており、文化は置き去りになっており、一般的には捉えにくい。 ●内容は充実しているが、広報方法を工夫することが求められる。今回は、関係者も参加しており、それ自体は歓迎すべきだが、本来は関係者ではない市民を参加対象としていることから、具体的にどのような活動をしている市民対象なのかを想定し、直接広報する等も一案である。また、参加者が抱える課題が多様なため、具体的アイデアの提供に至らない場合も見られた。 日程が限られているため、同内容で複数日程開催してもよいのではないか。	●こういった勉強会は、補助金関係なく各文化会館などで定期的に行われるべきで、欲を言えば、各会館の職員や、市の職員がノウハウを身に着け、実施すべき。 また、あらかじめ、堺市において文化芸術に携わるグループがどれぐらいの数で、どのような場所ですぐいったことをしているのか、調査もしていく必要がある。少なくとも、各文化会館からでも始めることはできる。補助金を絡めてという事であれば、補助金を受けたグループさんが、実施後、あるいは数年後、今後の発展につながるように勉強会を受けるべきである。 ●今回は、社会的課題の解決に関連するものの当事者の課題解決に重きが置かれていた。分野の異なる活動当事者が抱える課題同士をマッチングできると解決できる機会が増えると思われた。そのためには、参加人数を増やすことも大切と感じた。 (参加者の抱える課題を傍聴する立場だったため歯痒い思いをした。)

【参考】視察事業評価シート一覧

視察事業	「視察事業に対する評価」に関する意見		
	1 事業の評価に値する事項について	2 事業の改善すべき事項について	3 その他
◇企画担当者のためのワークショップ実践研修(展開編) 日程: 令和5年10月18日(水) 場所: 小規模多機能ホームリードけあ(中区)	●各文化施設(会館)は、市民と直接かかわる機会の多い最前線の現場であるゆえ、市民の文化行政に対する満足感に直結する。そこに所属する企画担当職員のアートマネジメント力及び意識(＝総合的なスキル)の向上は必須である。今回の視察対象は、昨年の座学・模擬実践を発展させ、現場でのWS実践に該当する。「文化芸術を通じた社会包摂」について、2年にわたって考え方や実践を研修する課程であり、本視察から、企画担当職員の総合的なスキルが着実に向上している様が伝わった。企画担当職員のグループ構成も工夫されており、各施設の意思疎通にも寄与すると考えられる。また、このような実践の場が設けられたことは、文化行政の担当者が関係施設などを訪問し説明してきたことによる成果といえる。企画担当職員は多様な主体と関わるため波及効果が大きく、彼らのスキル向上は、市民が文化芸術とともに生きるための根幹を担う基盤となる事業として非常に評価に値する。 ●ワークショップ「うたをつくっておどろう」を音楽(ピアノ)、ダンス、言葉、映像のアーティストと連携して実施。施設利用者から言葉を集めて俳句にし、その言葉を歌詞として曲を創作した後、全員で歌いながら自由に動くまでが和やかに行われた。創作の楽しさが味わえる企画で、アーティストの上田假奈代氏からワークショップの進行の仕方でも学べる内容である。施設に張られたチラシ作りなども良い経験となったはずだ。小規模多機能型居宅介護と就労継続支援B型との混合施設で、居宅介護の利用者が参加者の大半を占めたが、文化芸術を通して朗らかな時間を共有し、研修参加者の企画制作に対するモチベーションも上がったように思われた。	●WSの内容は、アーティストの力量により充実していたが、堺市の事業であることを説明する必要があるだろう。入所者や実施先関係者にとっては、一イベントに過ぎないと認識され、市の文化行政に対する満足度に繋がりにくい可能性がある。実施先で掲示されていたチラシにも、堺市の事業であることが明示されておらず、職員研修等を通じ、堺市の文化行政を担っている自覚や意識を徹底させるべきである。 ●企画書によると、企画の背景や目的に、「2つの施設の利用者が同じ時間を過ごし、双方のコミュニケーションの機会を増やす」「それぞれの施設利用者や職員の理解相互を促す」とあった。職員同士や居宅介護施設の利用者間の交流やコミュニケーションは生まれたように見受けられたが、就労継続支援施設の利用者の参加が少なかったのは残念だ。	●指定管理者が変わる場合や異動なども考えられるため、毎年定期的に実施する必要があると考えられた。 また、企画担当者のみならず受付等も市民と直接かかわる業務であるため、全職員を対象とするくらいの大きな目標をもって邁進されたい。 ●就労継続支援施設の利用者は、音や振動などに過敏な特性がある発達障害の方が多いと思われる。ワークショップ中、わりと大きな音を出していたので、扉一枚隔てた隣の作業所で作業をしていた就労継続支援施設利用者の負担やストレスに繋がらないか、気にかかった。その点を含め、ワークショップ実施後の両施設利用者の様子を、細やかにヒアリングする必要があるだろう。
◇アートスタートプログラム(音楽) 日程: 令和5年9月20日(水) 場所: 美原北こども園	●演奏のみならず、出演者の子どもたちへの語りかけも評価に値する。語り方が自然で温かみがあり、生き生きとしており、音楽の導入となる語りの内容も子供たちの関心を惹きつけるものであった。 それぞれの楽器や編成の特徴がよく生かされた楽曲、編曲であった。子どもたちの集中力の持続時間を考慮し、ちょうどよい頃(開始から20分くらい経った頃、伸びをしたり周りを見回したりする子どもたちの様子が目立ち始めた)に「参加型」の演奏が始まるなど、よく考えられたプログラムであった。 子供たちがよく知っている歌でも、伴奏や間奏が工夫されていた。子供たちにとっては新鮮に感じられ、広がりのある音楽体験となったのではないかと思われる。 ●総じて市が行うべき事業として評価に値しますが、特に下記の点について、非常に評価に値すると考えられます。 ①企画運営を実施している市文化振興財団が、募集段階から理念を明確にしている。 ②実施にあたっては事前に綿密な打ち合わせを行い、実施園ごとに適切な内容をその都度企画している。 ③認定こども園だけでなく社会福祉法人なども対象としている。 ④アーティストバンクの登録者且つアウトリーチ講座の受講者を起用している。 ⑤代表的な芸術ジャンルが用意されている。⑥募集要項が分かりやすい。	●「参加型」の演奏においては、子供たちが出演者の指示した通りに曲のリズムやタイミングに合わせて手を叩くなどのパターンになっていた。それとは別に、他の方法での参加があっても良いのではないか。演奏をじっくりと聴くということを重視するプログラムであれば適切ではないかもしれないが、例えば今回、「走りたいような曲」として《天国と地獄》が紹介されたが、その時に子供たちも走ってみるなど、自由な動きを促すことがあっても良いのではないかと思われた。いわゆる「じっとしていられない」子どもも、音楽のリズムに合わせて微かに足を動かしているように見えた場面があったので、そのような「自由な動き」を導入してみることも有効なのではないかと考える。ただし、今回のプログラムの終了後、保育者から子供たちへの言葉かけとして、「みんなよくがんばって静かに聴けました」という内容があったので、園としても子供たちが静かに聴ける音楽会を希望されたのかもしれない。 実施を希望した園のうち、可能であればすべての園でこのようなプログラムが行われるよう、事業が整備されると良いと考える。 子どもたちが体験したことを保護者と共有できるような機会があるとなお良いと思われる。こども園では保護者の参加は難しいと考えられるが、保護者にもプログラム内容を紹介するなど(実際に園でされている可能性もあるが)。 ●アーティストの養成及び演目の選定を継続的に検討することで、より効果的な内容になるものと考えられます。幼児であっても、市民(本事例では、概ね保護者からの税支出)によって、市(財団)の事業として実施していることは簡単で良いので、伝えるべきではないでしょうか。それは、堺市の文化芸術に対する誇りの醸成にもつながると考えられます。例えば本事例では、出演者の完全な善意によるものですが、「和歌山から来た」ことや「紀州犬マスコット」を使用しており、市の事業でなければ全く問題ないのですが、企画運営にあたっては堺市の事業である前提での事業展開をお願いします。なお、募集要項には、事業のクレジットが記載されており、大変評価できます。	●所感としては以下の通りです。 ・現場の先生は何らかの役割(参加を含め)を担う場面を設定できないか。そうすることで、幼児は出演者や内容を身近に感じるとされます。 ・演奏会ではないため、「暴れない」など最低限のルールのみで、近くで自由に見せられないでしょうか(先生方が出演者に配慮し幼児に指導し過ぎる)。 ・「知っている曲」「知らない曲」といった前提で進行しない方が良いのではないか。 (すべての子どもがアニメに親しんでいるとは限らない。また「知っている」と「理解している」は異なる。)

【参考】視察事業評価シート一覧

視察事業	「視察事業に対する評価」に関する意見		
	1 事業の評価に値する事項について	2 事業の改善すべき事項について	3 その他
◇さかいミーツアート(造形) 日程: 令和5年10月20日(金) 場所: 堺市立錦西小学校	●学校のニーズに合わせて、3つのコースが設けられていること。 実施当日までに学校の先生との打ち合わせを行い、各学校、クラスの状況に応じてアーティストを選定、内容を考えていく、毎回ワークショップ後に振り返りを行うことで、アーティストやコーディネートしている財団側にも、次への展開に向けた課題が抽出され、ノウハウが蓄積され、より充実したプログラムへとつながっていくフローができていること。上述したような丁寧なプロセスを経て実施されていることを高く評価します。 ●財団と学校、財団とアーティスト、各々の打合せが丁寧になされ、学校側もアーティスト側も不安も不満もなく、事業が実施できていることが確認できました。特に今回は2年生の図工の授業内での実施であったため、授業計画の上で学校側が安心感を抱いて受け入れられたことは、今後の授業の充実にも奏功すると思われます。 特に担任の先生が同僚の先生に語っていた「これだけの物量は学校だけでは無理だ」が印象的でした。アーティスト側の経験値・実践知の証左と捉えられます。	●最後の発表の時間が取れなかったことが残念でしたが、2時間の枠では、限界なのかもしれません。 サポートに入っている大人が、子どもの創作にどこまで手を出すのかは、難しいところですが、複数いたアーティストのチームの中で特に若いスタッフが、子どもの作業を手伝っているのは少し気になりました。 また、改善すべきということではいのですが、対象の学年についても少し気になりました。今回は2年生が対象でしたが、3年生、4年生の方が、意図はもう少し伝わったかなとも思います。学年設定をこちらである程度したほうが、想定しやすく、プログラムは作りやすいかもしれません。(改善すべきということではなく) ●今回の錦西小学校での調査事例からのみではありますが、「芸術教育」と「授業サポート」と「コミュニケーション」の3コースでの展開が妥当かの精査が必要ではないでしょうか。この点は、学校・アーティストからのフィードバックを期待します。 とりわけ、現在の3コースは「学校全体での鑑賞」「教員へのコンサルテーション」「直接的な授業設計・運営」といった性格づけと見受けられます。特にワークショップ型の取り組みではコースの境界が曖昧で、申し込む側に混乱がないか憂慮します。	●財団のスタッフが不足しているという状況をお聞きました。こういった事業の質を下げず(プロセスを丁寧に)にさらに継続して発展させていくには、経験値、専門値を持つ人材の確保は必要不可欠でしょう。有期雇用であることだけでなく、賃金がかかなり低いということで雇用につながらないということですので、人材の雇用については改善していく必要があるのではないのでしょうか。財団にノウハウやネットワークを蓄積し専門性高めていくことで、重点的施策もより充実し、長期的な効果も期待できると考えます。 ●「申し込み件数に対して実施校が限られている」点の善処として、財団によるコーディネートの工数を減らして実施することには慎重、むしろ反対の立場です。冒頭に述べたとおり、学校側の安心感が大いに削がれる可能性が高いからです。 ちなみに今回のアーティスト(スタジオぐるり)は通常、比較的高学年のこどもたちを対象とした場づくりにあたっているようでした。そうした背景も鑑みながら、アーティストとの協働による学びと成長の機会を創出していたことが印象的でした。
◇堺 アルフォンス・ミュシャ館作品企画展示事業 日程: 令和5年9月28日(木) 場所: 堺 アルフォンス・ミュシャ館	①現在開催中の企画展『モラヴィアンドリーム』について ・所蔵作品以外にもモラビア地方の民族衣装や林由未氏による人形が展示され、また各展示室の入り口の装飾なども伝統的なモチーフを取り入れたと思われるデザインが見られるなど、来場者が時空を超えて「夢」の世界に入り込めるような魅力ある展示空間が創られていた。 ・特別テーマ展示「夢見るヒヤシンス姫とくるみ割り人形の世界」(林由未氏による人形の展示)は、人形や背景による幻想的な物語世界が会場いっぱいに展開されており、特にこれらの物語に親しんでいる子どもたちを強く惹きつける展示空間ではないかと思われた。 ②館長よりうかがったこれまでの企画展示事業について ・企画により趣旨に合ったポスターやチラシが作成されており、それらが毎回デザインを募るかたちで製作されていることを知った。ポスターやチラシは展示の魅力を伝えるうえで重要であり、このように力を入れている点は評価できる。 ・夏休み中の企画展では、展示を観る子どもたちが楽しめるようクイズが出され、そのためのシートが配布された。報告者は実際にこの展示を小学生の子どもと共に観に行きシートも使ったが、子どもは大きな関心を示しながら展示を観ていた。こうした企画やそのためのデザイン等が優れていると評価できる。 ・今年度の企画展示において、近隣の洋菓子店とのコラボレーションによるオリジナル菓子の販売が行われた。このようなコラボレーションは、「五感で味わうアールヌーヴォー」という展示の趣旨にも合っており、来場者の層の広がりや地域への周知にもつながる、有益な企画だと思われる。 ●インターネットを活用しあらゆる年代層へ、また市外の方々へも向けて積極的に発信するなど限られた予算内で精一杯工夫され、来館者を増やそうと日々努力されていると感じた。 パンデミック時から今日に至るまで、出来る限りのキャンペーンやコラボレーションを実施され、単なる絵画鑑賞に留まることなく新たな展示を模索されている点に本事業の発展性と将来性を感じた。特に近隣地域その他業種と連携して新たな取り組みを展開されるなど、地元との密着度も非常に高く、文化芸術を通して様々な人々が繋がっていくことは文化芸術が秘めている力と可能性を発揮していると言えよう。 堺市立文化館はギャラリー用途としても活用されているが、学生といった若年層グループへの貸出や、昨今新たな需要となっている会議場としても貸出されるなど、柔軟性を持って対応されている点が評価できる。規模や施設のポテンシャルから考えた場合、確かに、自然の借景を利用し建物自体を観光地としているような所と比べると見劣りする部分もあろう。しかし、立地の観点からみると最寄駅からは直結しており、大阪市内及び和歌山方面からも集客出来る場所である。この利便性を今後も活かして頂きたい。	●夏休みの子どもたちが市内の美術館や博物館に無料で入館できる「ミュージアムパス」にミュシャ館も入っているが、「夏休み限定ではあまり効果がないのでは」という館長の話があった。検討の余地があると思われる。 視察した企画展示において人形劇の人形が展示されていることは事前にチラシで知っていたが、実際に展示を観て、想像以上に大掛かりな人形の展示がなされ、強い印象を受けた。広報において、もっと大きく取り上げてもよいのではないかと思われた。だが、ミュシャの作品とは別に「特別展」として展示されたものなので、ミュシャ館としては大々的に取り上げることは難しい、という面もあるのかもしれない。 同様に、たとえば上述した過去の洋菓子店とのコラボレーションなども、魅力的な企画なので、より効果的な広報活動を行うとよいのではと思われる。ミュシャ館や展示のことを知らなかった人が、洋菓子への関心から企画のことを知る、ということもあるのではないかと考える。 報告者は近隣に住んでいるが、ミュシャ館の存在や、どのような展示を行っているところなのか、あまり知らない人に会うこともある。地域とのつながりをより重視した広報が行われると良いのではないかと考える。たとえば、市内にあるチェコ領事館や実施されるチェコフェスティバルと連携した広報、あるいは、外部でチェコの音楽家やチェコの音楽と関わるコンサートが実施される場合などに、ミュシャ館や企画展示のことも紹介するなどの広報がより効果的に行われるとよいのではないか。 ●パンデミック後の中心来館者層が、60代女性から20代女性へ変化しているということなので、このボリューム層に刺さる取り組みを強化して頂ければと思う。写真パネルと撮影スペースが設けられているが、ミュシャが描く世界観にどっぷり浸れ、そしてSNS映えも叶えられる、例えば展示作品から取り出した様に錯覚する程の衣装を用意するなど、他館がやっていないようなサービスを期待したい。 他文化施設(百貨店の文化催事も含む)にはよく、近隣エリア施設の開催情報を提供するパンフレットが置かれているが、ミュシャ館のパンフレットの取り扱いを見た記憶がない。もし現時点で殆ど扱いがないのであれば、近畿圏の他施設に協力を仰ぎ、パンフレットを常置してもらってみてはどうか。手に取って、ダイレクトに情報を得るアナログ広報活動の活発化も出来れば検討頂きたい。	●ミュシャの作品に由来する楽譜から、堺市新進アーティストバンク登録の演奏家によるメロディが時折、BGMとして鑑賞フロアに流れているのも面白い取り組みであった。鑑賞フロアだけでなく、玄関でも使用してはどうか。日常から非日常へと誘う効果的な演出となり、鑑賞に対する期待感が高まるのではないだろうか。 ミュージアムグッズは、同規模の他文化施設より充実していると感じる。個人的には、普段使いの文具類が買い求めやすく、プレゼントにも喜ばれると思うので、更なる充実を期待したい。 また、鑑賞後でもグッズで引き続き絵を楽しみたいというファンの方も多いが、少々ビジネスシーンで使用しづらい印象を受けた。絵を小振りにするなどして、誰でも、またどんなシーンでも使用できるグッズもあっていいのではないかと思う。

【参考】視察事業評価シート一覧

視察事業	「視察事業に対する評価」に関する意見		
	1 事業の評価に値する事項について	2 事業の改善すべき事項について	3 その他
◇東京混声合唱団 日程: 令和5年10月8日(日) 場所: フェニーチェ堺	●地元堺の合唱団とプロである東京混声合唱団と一緒にステージで共演する非常に意義のある取り組みである。子供のステージもあり、小さい頃からプロのアーティストと共演することで、合唱を肌で感じ、子供自身の意識が向上することが期待される。子供限らずプロとの共演そして指導を受けた堺の合唱団の、意識や質の向上を期待できる。 ●全国各地の市民合唱団は、もとより高齢化による活動の縮小や衰退が課題であったが、コロナ禍の3年間、活動の休止を強いられたことで、団員の体力の限界や意欲の減退から解散に至った団体も少なくない。その中で、1991年に結成され30年以上活動してきた「堺市合唱連盟」の存在意義は大きい。 また、フェニーチェ堺(公益財団法人堺市文化振興財団)による自主企画として、東京混声合唱団と堺市合唱連盟とのコラボレーションが実現したことは快挙である。「コロナ禍で勢いを失った市民の合唱活動のモチベーションを上げ、市民の文化芸術活動の活性化を図ることを目的とする」企画で、堺市合唱連盟に加盟する19の合唱団から212名の市民が参加。一線の指揮者や作曲家の指導のもと、所属団体を越えた交流が促進された意義も大きい。 東京混声合唱団との合同ステージは休憩後の前半に組み込まれ、現在の合唱界で最も人気のある作曲家、信長貴富の4作品(うち3曲は谷川俊太郎の詩による)が合同演奏された。混声合唱曲「合唱」は、男声の参加が少なく、バランスの面で懸念があったが、高水準のハーモニーを醸成し、堺市の市民合唱のレベルの高さを発揮した。ジャズ風のリズムが楽しい女声三部合唱「君歌えよ」に続き、同声二部合唱「未来へ」では賢明学院小学校合唱部のメンバーが加わり、高齢者が大半を占める舞台から、まさに「未来」の歌声が輝きを放った。 4曲目の混声四部合唱「くちびるに歌を」の作詞はツェーザル・フライシュレンで8分ほどの大曲。ここで男声陣が急に増えた。導入部はドイツ語による歌唱であったが、母音と子音の関係が曖昧なため、イントネーションがぼやけ、ほとんどコトバを聞き取ることができなかった。専門家による原語指導が必要だろう。(今後「第九」に取り組むのであれば、なおさらである)。途中から日本語による歌唱に代わるや、非常に明晰な発声となり、コトバの大切さを痛感した。コーダのfffでもハーモニーに濁りがなく、4声が有機的にブレンドしていた。8月20日には、信長貴富自身が事前レクチャーのためにフェニーチェを訪れていたという。作品への十分な理解があってこそ可能となった名演だ。 プログラムの前半は、東混のみの珠玉のステージで聴衆を魅了した。特に会場全体から響き渡る「コンダリラ」(滝の精)のサウンドスケープは、合唱音楽に精通していない聴衆には未曾有の体験になったと思う。 三善晃編曲による「唱歌の四季」は、冒頭の「朧月夜」の前奏からしてピアノパートのセンスが抜群。たんなる伴奏ではなく、ピアノの独立性が高く、その鮮烈な立体感に深く心を動かされた。ピュアーなアカペラから始まる「夕焼小焼」は、しだいに大きな広がりのある世界へ高まり、会場の聴衆全体を暖かく抱擁した。三善晃の人間観、世界観、そして卓越した芸術性に改めて脱帽した。 プログラムの最後に置かれた「エンジョイコーラス」は、愛唱歌や歌謡曲をアレンジした親しみやすい歌の花束。とくに「瀬戸の花嫁」のメゾソプラノのソロが印象に残った。日本語の美しさを極めていたからである。 先鋭的な合唱音楽を求める聴衆やアマチュア合唱人には、やや物足りないプログラムだったと思われるが、アフターコロナに行うべき自主企画としては、ターゲットゾーンの拡大に効果的に貢献していた。	●堺の合唱団に限らず合唱団は全体的高齢化されていることが懸念される。リタイヤされた方の一つの楽しみに終わらず、20代から40代の方々の参加がもう少し増えれば、長く続く取り組みになるのではと考えられる。 今回の合唱は子供とのコラボレーションがもう少しあっても良いかと感じた。 ●今後「第九」などの企画に取り組む場合、原語指導や作品への十分な理解を深める講座や練習や必要だろう。また、司会進行者はユーモアがあり、憎めない性格の方であったが、言語不明瞭のため、聞きづらかった。ただし、プロの司会者の場合、話し方は上手でも内容面での掘り下げが浅い場合もある。司会進行については、適任者の選定に配慮すべきであろう。 また、合唱は高齢者の生きる源になっているが、一般に市民合唱団の場合、指導者が力を持ち、指導者主導のコミュニティが形成されがちである。それが各団の個性にもなる反面、敷居が高く、入団しにくい原因になることもある。今回の企画は、その垣根を越えた交流にとつての第一歩になっているが、さらに、いままで合唱と縁の浅かった市民にも開かれた企画(初心者講習など)が望まれる。	●関西には、びわ湖ホール声楽アンサンブル、神戸市混声合唱団という、東混に匹敵する実力派のプロの合唱団がある。この手の企画は毎年、行うべきであるが、関西の合唱団とのコラボレーションも検討する価値があるだろう。

【参考】視察事業評価シート一覧

視察事業	「視察事業に対する評価」に関する意見		
	1 事業の評価に値する事項について	2 事業の改善すべき事項について	3 その他
◇ベルリン・フィル八重奏団 日程: 令和5年11月30日(木) 場所: フェニーチェ堺	●世界でも有数の音楽楽団であるベルリンフィルを招聘し、質の高い公演を実施することは、堺市内だけでなく国内外へも発信していくという目的に沿った取り組みであり、全国的にメディアに取り上げられるなど、堺のブランド力を高め、市民の誇りの醸成にもつながっていくだろう。 フェニーチェ堺の施設全体としては、3つの基本方針があり、鑑賞公演、創造・発表公演、まちの活性化、人材育成事業、普及啓発事業と枠組みが明確に設定され、ミッションに沿って事業に取り組まれている。高校生が参加するDance Powerや普及啓発事業においては、子どもや障がい者などを対象にしたプログラムなどアウトリーチの取り組みもあり、鑑賞するだけではない多彩な事業展開が積極的に実施されていると見受けられた。 ●ベルリン・フィルハーモニーのメンバーによるアンサンブルの中でも、とりわけ伝統ある八重奏団の6年ぶりの来日ツアーという、貴重な公演である。 私はこれまで、大ホールではオーケストラやオペラの公演を聴いたことがあるのみで、室内楽アンサンブルを聴くのは初めてだったが、アンサンブルの繊細な響きの魅力を十分に伝えるホールであると認識した。 プログラムには日本初演の現代音楽も含まれていたが、現代音楽に馴染の薄い聴き手にとっても、音の重なりや伸びやかさにじっくりと耳を傾けられるような、受け入れやすい曲だったのではないかなと思われる。 ●同様の鑑賞公演において、市外からの観客が80%を超え、更に彼らは市役所展望ロビーにも立ち寄る傾向にあるなど、フェニーチェ堺の認知度向上に寄与していると考えられる。また、今回の公演はベルリン・フィル関連の演奏会でも室内楽であるため、観客も出演者や演目などの目的をもっている来場者であると考えられる。そのような観客に対し、フェニーチェ堺の優れている点は理解されていると思われる。 ●公演事業で特筆すべきは、京阪神で開催されていないプログラムを提供するよう工夫されている点と、技術スタッフの方が在籍している強みを生かした独自制作プログラムを発信している点である。 市外からのお客様には堺の魅力を知って頂く絶好の機会となり、また、堺で活動する地域文化団体とプロ組織の共同制作が叶う場所があることは、堺の文化資産の活用と文化団体のポテンシャルの底上げへと繋がり、効果は波及的に広がっていくものと思う。 各公演ごとにアンケート集計が行われ、回収率は高いとは言えないが観客の動向をつかめる内容となっている。前年度のアンケートの中で、少ないながらも改善して欲しい点や苦情が挙がっていたのであるが、今回の視察を振り返ると来場者のご意見を汲み取って改善が試みられていると感じた。	●視察した公演の来場者数については、ホールのキャパ2000席のうち1100にとどまっており、開催する曜日などについても検討する必要があるのではないかな。業界全体のしくみの問題だと考えるが、プログラム構成の工夫はもう少しできたのではないかな。主催者側の意向では調整できないパッケージ化された興行では、そういった調整が難しいといお聞きしたが、「多くの人に魅力を伝える」という目的に対して、効果的かつ有効な内容となっているのかどうか、今後、堺市独自の企画をどれだけ手がけられるのかということも含めて検討していくべきではないかな。 ●集客数が目標数に達しなかったようである。集客数を増やすために、たとえば今回に関して言えば、プログラムにシューベルト《楽興の時》という。ピアノ学習者が習うことの多い曲の八重奏版が含まれているので、ピアノ教室等に十分な広告宣伝をすると良かったのではないかな。とはいえ、平日の夜の公演であるということにより、ピアノを習っている若年層やピアノ教師の来場は難しかったかもしれない。 私が会場へ向かう途中、同じ公演に向かっていると思われる方々が、ホールに併設されたレストランのことを話しておられるのを耳にした。来場者の中には、レストランの魅力にも惹かれているものの、平日の夜の公演のため、公演の前後にレストランを利用することは難しい方々も少なくないと思われる。そこで、たとえば休憩時間にホワイエにて、レストラン提供の飲み物や軽食がとれる場があると良いのではないかなと思われる。魅力的なレストランを併設したホールならではのサービスを充実させることも、集客につながる要素の一つであると考ええる。 ●今回の視察対象は、ベルリン・フィルを招聘する音楽事務所が提示する制約あるプランであり、フェニーチェ堺ならではの独自性は感じられなかった。演奏のクオリティーは、出演者のレベルを勘案すれば当然である一方、開演時に奏者が揃わないなど、彼らにとってはツアーをこなす程度の認識なのかもしれないと憶測してしまった。このような世界的ブランド団体(アーティスト)の演目を上演する場合は、音楽事務所と対等に交渉し、世界でフェニーチェ堺でしか聴けない構成や演目にするような力が求められる。 ●京阪神においてフェニーチェ堺でしか鑑賞できないプログラムを用意し、堺の認知と街の賑わいに繋げていくことを目的として市外からの集客も大事に考えておられるが、平日18時に開場するプログラムが多く、日程設定が鑑賞行動の妨げになっている感が否めない。出演者のスケジュール調整や公演料金設定の兼ね合い等、休日開催が難しい部分もあるが、素晴らしいプログラムを多くの方々に提供する工夫(例えばプログラムの映像をCATV等で配信するなど)をしてみてもはどうだろうか。本来は堺にお越し頂いて、文化芸術を直接に体験して頂くのが理想ではあるが、鑑賞行動の足掛かりになる仕掛けを期待したい。 施設を稼働させるにあたり、文化芸術の発信と市民活動の場とすることのみならず、コンベンション利用の対応もなされている点は評価できる。しかし、開館直後にパンデミックがあったとはいえ、利用頻度が低いままという点は非常に残念である。2か国語対応可ということなので、医学系の学会大会にも活用できるであろう。学会大会レベルでは全国ないし世界から参加者が集まり、2日程度に渡って行われることが多く、会場使用に留まらず、宿泊・飲食・観光といった多方面に経済効果がもたらされる可能性が高い。観光とセットバックになったプランを、所管や民間と公の垣根を越えて作り、積極的な売り込みを模索頂ければと思う。	●堺市独自企画を生み出していくためには、専門性、経験によるネットワークのあるスタッフの配置、そのための予算も必要になってくるが、将来的にどう舵を切っていくのか、市としての将来的な展望をもとに財団スタッフの構成について再考していくことも必要ではないかな。 ●市民会館時代の利用目的(結婚式場)や他公演や事業全体の説明を受け、消費者行動・心理の観点も取り入れ、文化芸術を中心としつつも他のジャンルや異領域とタイアップし、訪問・利用したことでストーリーが生まれるような設定であると、来場者にとって堺市やフェニーチェ堺が特別な場となり得るのではないかなと感じた。